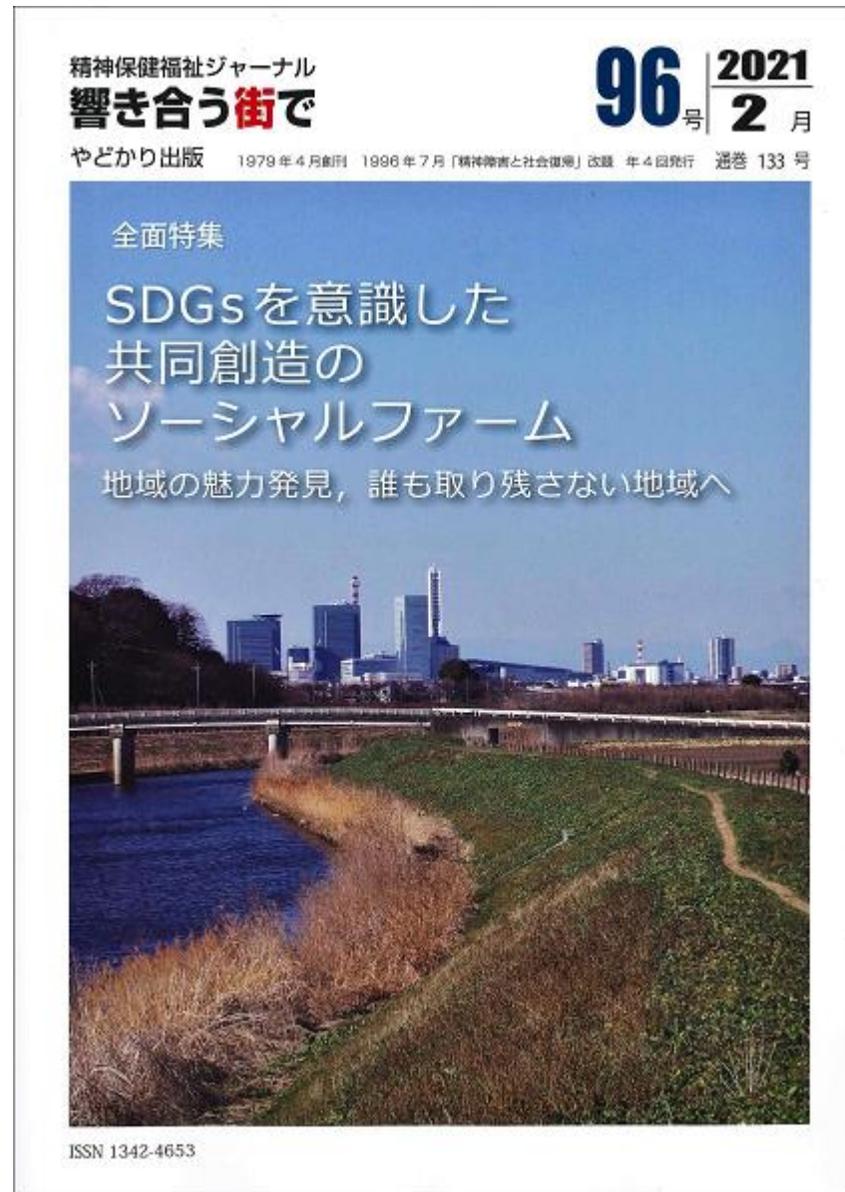


「響き合う街で」No. 96 (2021年2月発行：やどかり出版)

やどかり出版は、精神障害者の地域生活を支える活動をしている公益社団法人やどかりの里を母体にした出版社です。企画、編集、製作、印刷、製本、販売の各部門に障害者が雇用され活躍しています。



3. 農や自然と関わる地域活動

レポート8

いのちの森づくり 進和学園・株式会社研進の実践

森づくりは人づくり

丸 志伸 (株式会社ベストワーク)

私の住むさいたま市では植木生産が地場産業の1つである。しかし、高齢化によって生産活動を引退する事業者が増え、地場産業継承が難しくなっている現状がある。この状況に対する打ち手の1つとして、私はやどかり情報館で働く障がいのある人を始め、さいたま市内の複数の障がい者支援団体と協働で、障がいのある人たちに植木生産プロセスの一部を依頼し、今後の地場産業の担い手を創出する活動に2017年から取り組んでいる。

一方、この活動と同時並行で、簡易的な盆栽(カジュアル盆栽)の生産販売において、鉢の製作を障がい者団体にもお願いして、広く、植木に関わる活動の中で、障がいのある人たちに“出番”を創造する活動をしている(注:本誌レポート5に詳細)。

さて、本レポートで紹介する進和学園は、福祉施設として幅広く多くの事業を展開し、今回注目するのは、「いのちの森づくり」プロジェクトである。自事業所で生育させた苗を、荒廃が進む各地の山林や学校を始めとする施設に植える活

動を展開している。私の事業とも関連付けて「植物を通じた事業」という観点で、参考情報を得たいと考え2019年、2020年に視察訪問に伺った。

この時に現地で快くお話をお聞かせいただいたのが、進和学園グループで「いのちの森づくり」プロジェクトを実際にコーディネートしている株式会社研進^{注1)}の出縄貴史さんと加藤ナルミさんである。

この時のご縁もあり、2020年8月3日の「未来を拓く つなぐ・つくるプロジェクト」(以下T.Tプロジェクト)の会議にお2人にご登壇いただいた。

本レポートは、訪問時のお話とプロジェクト会議でのご講演内容をまとめ、私の事業の考え方も整理している。

1. 進和学園の概要

社会福祉法人進和学園は、『本人中心』

注1) 株式会社研進は、進和学園グループでの様々な事業を推進するため、各種団体・行政並びに各個人との連携をとり、協働できる体制づくりをしている。

『一人には一人のひかり』を創立の標語として、神奈川県平塚市を中心に障害者支援施設と子育て支援施設を運営し、現在は全体で17か所の事業所を運営している。

戦後復興期の1958(昭和33)年6月に知的障害児入所施設を開業、就労支援は1974(昭和49)年に始まった本田技研工業からの部品組立請負事業を中心に、現在では製パン・クッキー、農産物加工、原木しいたけ、クリーニング、クラフト、陶芸などの自主製品販売や施設外就労の他に「いのちの森づくり」にも注力をする等、多方面での事業を拡大している。<http://www.shinwa-gakuen.or.jp/about/>

2. 「いのちの森づくり」活動の概観

「いのちの森づくり」は、世界的に著名な生態学者である宮脇昭先生(横浜国立大学名誉教授)が提唱される潜在自然植生理論^{注2)}に基づいた「その土地本来の木による本物の森づくり」を目指している。

宮脇先生は日本各地に足を運んで長年かけて植生調査を行ってきた。「いのちの森づくり」では、この調査結果に基づいて、進和学園の利用者自身が直接集めた、カシ・タブ・クヌギを始めとする高木の他、イロハモミジ・ヤブツバキ等の

中木、アオキ・ヒサカキ等の低木の種を、事業所のビニールハウス(300坪×2棟)で、ポット(鉢やつぼ等の容器)にて育苗している。

人間の都合で材木として使いやすい等の画一的な樹種に絞るのではなく、痩せてしまった山林を最も自然に近い形で蘇らせるために、潜在自然植生の考え方を基に、苗として根をしっかりとポットに充満させ、多くの樹種を混ぜて苗を植えるイベント、植樹会を開催している。他団体の森林再生プロジェクトと連携し、進和学園の関係者はもとより、広く自然を愛する一般の方々もこの植樹会に参加し、活動の規模は拡大している。

一方、学校・公園・企業などの施設にも植樹し、潜在自然植生を広める活動を展開している。各施設での植栽は多くの人の目に触れることから、潜在自然植生の存在を多くの人たちに伝え、人々が本来の自然に近い植生に触れ合うことのできる機会を提供している。

これらのまさに“地に足がついた活動”は多くの方々に自然の豊かさを伝えているが、施設管理上、除草・剪定などの植栽管理が必要な場合がある。そのような場合は「いのちの森づくり」に付随する活動として進和学園が中心となって福祉施設(現在12施設)から結成されている「どんぐりブラザーズ」が出動して、

植樹したあとの管理業務を請け負うという体制が整えられている。

2006年から始まった「いのちの森づくり」だが、これまで植樹した苗の数は30万本を超えており、活動の大きさは容易に想像し難いレベルである。この活動は神奈川県内にとどまらず、静岡県・広島県等の遠隔地にも波及している。

3. 私が共感・賛同したこと

学術的にも裏付けされ、かつ組織としても拡大している「いのちの森づくり」に、私が最も共感し、賛同したことは、活動の始まりから結果までが一連のストーリーになっていること、さらにその活動の経済基盤が整えられていることである。

1) 活動全体に感じるストーリー

潜在自然植生には、背の高い木(高木)から低い木(低木)まで、さまざまな樹種が混じり合い、共存することで、最も安定した生態系が維持されるという世界



進和学園「どんぐりハウス」(苗木の栽培現場)

観がある。そして、障がいのある、なしにかかわらず多くの人たちがプロジェクトに参画することで体現していることには、植物を育て、健全な森を形成すること以上のストーリーを感じる。自然豊かな植生だけにとどまらず、人間社会も多様な人たちが混ざり合い、助け合うことで、調和のとれた世界が出来上がることは、多くの人が望む姿と言えよう。

「いのちの森づくり」においては、そこに関わる人たちが種から苗を育て、植樹し、その後の管理などの全般を通じて、障がいのある、なしにかかわらず、プロジェクトのさまざまな場面で、それぞれが自身のできる範囲で参画し、体験できるプロセスが構築されている。さらに、その意義について、各人の体験を積み重ねて理解し、潜在自然植生の形成という結果として導くという、啓発活動と植生形成を合わせた1つの大きなストーリーになっていると捉えられる。

さまざまな自然保護の活動は世の中に多いが、ここまで一貫した考え方で多くの人々が参画しやすく、また、自然の持つ豊かさと社会形成のあり方の双方を体現している活動があることを知り、私自身も大いに勉強させてもらった。

2) 経済基盤としての基金

資金調達の面では「いのちの森づくり友の会」が創設され、工夫が凝らされている。活動に共感・賛同する個人にとどまらず、企業・団体から

注2) 潜在自然植生とは、元々、それぞれの土地には固有の植生があり、植生本来の生態系を維持することが大切だという考え。自然の営みの中で生まれた植生には、山間部での土砂崩れを防ぐ、また海岸沿いでは津波にも耐えうることのできる森になる。潜在自然植生による木の根は地中深く根を張り、保水機能が高まり、自然の力が際立つことにより、環境・防災面でも大きなメリットをもたらす。

の協賛金が得られやすいように、損金計上や寄付控除が受けられる。協賛する企業・団体内の社員・メンバーに向けても「いのちの森づくり」の認知度を高め、社員・メンバーの啓発にも繋がっている。「いのちの森づくり」に関心のある個人や企業・団体が、植樹イベントに参加する他に、資金協力者として参画し、潜在自然植生の考え方への共感・賛同を育み、活動の基盤をますます強めている。

集められた基金は、進和学園はじめ「どんぐりブラザーズ」に属する福祉施設の利用者の工賃に反映されるだけでなく、植樹等の活動を継続的に推進する源にもなっている。

4. 「いのちの森づくり」 今後の課題

8月3日のT.Tプロジェクトの会議での出縄さんのお話によると、「いのちの森づくり」は、既に西日本には活動が拡大されていて、今後は関東以北にも活動を広げていきたいということだった。

2011年の震災以降、「いのちの森づくり」では台風・地震・大火・津波にも耐えられる森の防潮堤づくりとして、東北地方にもシイ・タブ・カシなどの高木をはじめ中低木も交えて植樹推進を続けてきたそう。今後は、潜在自然植生に共感・賛同を得て、企業や自治体などとも連携を強め、植樹地を見出し、潜在自然植生を拡充する意向があると述べられた。

私は、潜在自然植生そのものの意義と併せて、「いのちの

森づくり」がどのような結果を描いているのかを、わかりやすく多くの人に伝えていく方法を見出すことも大切であろうと感じた。「いのちの森づくり」からは、活動が福祉・環境・労働・教育等の多方面において、多くの好影響を及ぼすことの全体像が示されている(図1)。

一方で、新規の協力者を呼び込むためには、相手の状況に応じた告知活動上の方法について検討する余地があるのではないかと考えた。「いのちの森づくり」は多くの要素を含み、高尚な理論と具体的な活動を連結させた活動である。福祉に関心があるのか、また環境問題に関心があるのか等、捉える人の視点に合わせた告知活動も効果的であるように感じた。

先述したように“1つの大きなストーリー”を相手に応じて、わかりやすく表現することで、確実に活動を拡大していくこともできるのではないかと考える。

5. T.Tプロジェクトとして参考になること

私たちのT.Tプロジェクトはまだ立

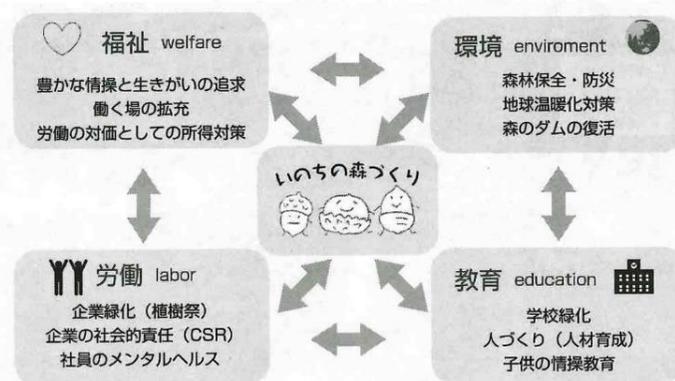


図1 いのちの森づくり(進和学園ホームページより転載)

ち上げ期であり、実際の活動テーマのフォーカスはこれからだが、今後の検討を進める過程で、「いのちの森づくり」からは参考になる多くの内容があった。

1) 複数の社会課題を同時に解決するアプローチ

取り組む活動の結果、解決できる社会的な課題には何があるか、1つの課題に対して1つの解決策ではなく、いくつもの課題に対して1つの解決策で対応できるのではないかとこの視点は重要であろう。実際に、「いのちの森づくり」を、福祉・環境・労働・教育のそれぞれの側面の課題解決に繋げていることは、T.Tプロジェクトでも参考になる点が多い。

既にT.Tプロジェクトの中でも、地元の課題としても、農業離れ、地域コミュニティの希薄化、居場所を必要とする人たち等、さまざまな視点で意見が出されていて、実際に起きていることだけではなく、その背景・要因を探ることで、複数の課題を共通に解決できる活動を設計できるのではないかと考える。

2) 収益モデルの見出し方

広く社会課題を解決することと経済活動はなかなか結びつけにくいという現状があり、ソーシャルファームの形成は容易ではないと議論されてきた。プロジェクトの構想を検討する際に「いのちの森づくり友の会」のような資金集めについて、地域課題の解決と共に考えていくと良いのではないかと、今日的な方法として、クラウドファンディングもその1つ

だが、資金を提供した側も自身の満足にとどまらず、参画者を増やしていけるような構図が描けるのではないかと。

6. 私自身の活動への結びつけ

このレポートの冒頭で私の地元での活動について述べたが、「いのちの森づくり」を参考にしながら、私自身の活動に関わる人たちの輪を広げていくことの大切さを改めて考えた。

「いのちの森づくり」に、1日だけ気軽に参加できる植樹会があり、また継続的な活動の場でもある「どんぐりブラザーズ」があり、多くの人々が活動に参加する門戸を開いていることは、参考になる取り組みである。

私自身の活動は「いのちの森づくり」の規模の大きさと背景理論の精緻さとも比べものにはならないが、植木や盆栽の生産から販売、また販売したお客様のフォローまでのそれぞれのプロセスで気軽に多くの方々が参加できるようなワークショップなどの機会を作りたいと考えている。活動に参加いただく人々の母集団を増やすことができれば、結果として事業を進めるための幅広いネットワークも形成できる。また、商品の販売だけではなく、基金のような経済基盤になる受け皿(クラウドファンディング)も必要なタイミングで開設できる可能性を拡大することもできるであろう。

謝辞: 進和学園並びに「いのちの森づくり」に関わる方との貴重なご縁に心より感謝します。